忠義

芥川龍之介

一

前島林右衛門（まえじまりんえもん）

板倉修理（いたくらしゅり）は、病後の疲労が稍（やや）恢復すると同時に、はげしい神経衰弱に襲われた。――

肩がはる。頭痛がする。日頃好んでする書見にさえ、身がはいらない。廊下（ろうか）を通る人の足音とか、家中（かちゅう）の者の話声とかが聞えただけで、すぐ注意が擾（みだ）されてしまう。それがだんだん嵩（こう）じて来ると、今度は極些細（ごくささい）な刺戟からも、絶えず神経を虐（さいな）まれるような姿になった。

第一、莨盆（たばこぼん）の蒔絵（まきえ）などが、黒地に金（きん）の唐草（からくさ）を這（は）わせていると、その細い蔓（つる）や葉がどうも気になって仕方が

ない。そのほか象牙(ぞうげ)の箸(はし)とか、青銅の火箸とか云う先の尖(とが)った物を見ても、やはり不安になって来る。しまいには、畳の縁(へり)の交叉した角(かど)や、天井の四隅(よすみ)までが、丁度刃物(はもの)を見つめている時のような切ない神経の緊張を、感じさせるようになった。

修理(しゅり)は、止むを得ず、毎日陰気な顔をして、じっと居間にいすくまっていた。何をどうするのも苦しい。出来る事なら、このまま存在の意識もなくなしてしまいたいと思う事が、度々ある。が、それは、ささくれた神経の方で、許さない。彼は、蟻地獄(ありじごく)に落ちた蟻の様な、いら立たしい心で、彼の周囲を見まわした。

しかも、そこにあるのは、彼の心もちに何の理解もない、徒(いたずら)に万一を惧(おそ)れている「譜代(ふだい)の臣」ばかりである。「己(おれ)は苦しんでいる。が、誰も己の苦しみを察してくれるものがない。」――そう思う事が、既に彼には一倍の苦痛であった。

　修理の神経衰弱は、この周囲の無理解のために、一層昂進の度を早めたらしい。彼は、事毎(ことごと)に興奮した。隣屋敷まで聞えそうな声で、わめき立てた事も一再ではない。刀架(かたなかけ)の刀に手のかかった事も、度々ある。そう云う時の彼はほとんど誰の眼にも、別人のようになってしまう。ふだん黄いろく肉の落ちた顔が、どこ

と云う事なく痙攣して眼の色まで妙に殺気立って来る。そうして、発作が甚しくなると、必ず左右の鬢の毛を、ふるえる両手で、かきむしり始める。――近習の者は、皆この鬢をむしるのを、彼の逆上した索引にした。そう云う時には、互に警め合って、誰も彼の側へ近づくものがない。

発狂――こう云う怖れは、修理自身にもあった。周囲が、それを感じていたのは云うまでもない。修理は勿論、この周囲の持っている怖れには反感を抱いている。しかし彼自身の感ずる怖れには、始めから反抗のしようがない。彼は、発作が止んで、前よりも一層幽

鬱な心が重く頭を圧して来ると、時としてこの怖れが、稲妻のように、己（おのれ）を脅（おびや）かすのを意識した。そうして、同時にまた、そう云う怖れを抱くことが、既に発狂の予告のような、不吉（ふきつ）な不安にさえ、襲われた。「発狂したらどうする。」

——そう思うと、彼は、俄（にわか）に眼の前が、暗くなるような心もちがした。

勿論この怖れは、一方絶えず、外界の刺戟から来るいら立たしさに、かき消された。が、そのいら立たしさがまた、他方では、ややもすると、この怖れを眼ざめさせた。——云わば、修理の心は、自分の尾を追い

かける猫のように、休みなく、不安から不安へと、廻転していたのである。

　修理（しゅり）のこの逆上は、少からず一家中の憂慮する所となった。中でも、これがために最も心を労したのは、家老の前島林右衛門（りんえもん）である。

　林右衛門は、家老と云っても、実は本家の板倉式部（いたくらしきぶ）から、附人（つけびと）として来ているので、修理も彼には、日頃

から一目（いちもく）置いていた。これはほとんど病苦と云うものの経験のない、赭（あか）ら顔の大男で、文武の両道に秀（ひい）でている点では、家中（かちゅう）の侍で、彼の右に出るものは、幾人もない。そう云う関係上、彼はこれまで、始終修理に対して、意見番の役を勤めていた。彼が「板倉家の大久保彦左（おおくぼひこざ）」などと呼ばれていたのも、完（まった）くこの忠諫（ちゅうかん）を進める所から来た渾名（あだな）である。

林右衛門は、修理の逆上が眼に見えて、進み出して以来、夜の目も寝ないくらい、主家のために、心を煩（わずら）わした。――既に病気が本復した以上、修理は近日中に病緩（びょうかん）の御礼として、登城（とじょう）しなければならない筈で

ある。所が、この逆上では、登城の際、附合の諸大名、座席同列の旗本仲間へ、どんな無礼を働くか知れたものではない。万一それから刃傷沙汰にでもなった日には、板倉家七千石は、そのまま「お取りつぶし」になってしまう。殷鑑は遠からず、堀田稲葉の喧嘩にあるではないか。

　林右衛門は、こう思うと、居ても立っても、いられないような心もちがした。しかし彼に云わせると、逆上は「体の病」ではない。全く「心の病」である——彼はそこで、放肆を諫めたり、奢侈を諫めたりするのと同じように、敢然として、修理の神経衰弱を諫めよ

うとした。

　だから、林右衛門は、爾来（じらい）、機会さえあれば修理に苦諫（くかん）を進めた。が、修理の逆上は、少しも鎮まるけはいがない。寧（むし）ろ、諫（いさ）めれば諫めるほど、焦（じ）れれば焦れるほど、眼に見えて、進んで来る。現に一度などは、危く林右衛門を手討ちにさえ、しようとした。「主（しゅう）を主（しゅう）とも思わぬ奴じゃ。本家の手前さえなくば、切ってすてようものを。」――そう云う修理の眼の中にあったものは、既に怒りばかりではない。林右衛門は、そこに、また消し難い憎しみの色をも、読んだのである。

　その中（うち）に、主従の間に纏綿（てんめん）する感情は、林右衛門の

重ねる苦諫に従って、いつとなく荒(すさ)んで来た。と云うのは、独り修理が林右衛門を憎むようになったと云うばかりではない。林右衛門の心にもまた、知らず知らず、修理に対する憎しみが、芽をふいて来た事を云うのである。勿論、彼は、この憎しみを意識してはいなかった。少くとも、最後の一刻を除いて、修理に対する彼の忠心は、終始変らないものと信じていた。「君(きみ)君為(きみた)らざれば、臣臣為らず」――これは孟子(もうし)の「道」だったばかりではない。その後(うしろ)には、人間の自然の「道」がある。しかし、林右衛門は、それを認めようとしなかった。……

彼は、飽(あ)くまでも、臣節を尽そうとした。が、苦諫の効がない事は、既に苦い経験を嘗(な)めている。そこで、彼は、今まで胸中に秘していた、最後の手段に訴える覚悟をした。最後の手段と云うのは、ほかでもない。修理を押込め隠居にして、板倉一族の中から養子をむかえようと云うのである。——

　何よりもまず、「家」である。（林右衛門はこう思った。）当主は「家」の前に、犠牲にしなければならない。ことに、板倉本家は、乃祖(だいそ)板倉四郎左衛門勝重(かつしげ)以来、未嘗(いまだかつて)、瑕瑾(かきん)を受けた事のない名家である。二代又左衛門重宗(しげむね)が、父の跡をうけて、所司代(しょしだい)として令聞(れいぶん)があっ

たのは、数えるまでもない。その弟の主水重昌（もんどしげまさ）は、慶長十九年大阪冬の陣の和が媾（こう）ぜられた時に、判元見届（はんもとみとどけ）の重任を辱（かたじけな）くしたのを始めとして、寛永十四年島原の乱に際しては西国（さいごく）の軍に将として、将軍家御名代（ごみょうだい）の旗を、天草（あまくさ）征伐の陣中に飜（ひるがえ）した。その名家に、万一汚辱を蒙らせるような事があったならば、どうしよう。臣子の分として、九原（きゅうげん）の下（もと）、板倉家累代（るいだい）の父祖に見（まみ）ゆべき顔（かんばせ）は、どこにもない。

こう思った林右衛門は、私（ひそか）に一族の中（うち）を物色した。すると幸い、当時若年寄を勤めている板倉佐渡守（さどのかみ）には、部屋住（へやずみ）の子息が三人ある。その子息の一人を跡目（あとめ）にし

て、養子願さえすれば、公辺（こうへん）の首尾は、どうにでもなろう。もっともこれは、事件の性質上修理や修理の内室には、密々で行わなければならない。彼は、ここまで思案をめぐらした時に、始めて、明るみへ出たような心もちがした。そうして、それと同時に今までに覚えなかったある悲しみが、おのずからその心もちを曇らせようとするのが、感じられた。「皆御家のためじゃ。」――そう云う彼の決心の中には、彼自身朧（おぼろ）げにしか意識しない、何ものかを弁護しようとするある努力が、月の暈（かさ）のようにそれとなく、つきまとっていたからである。

病弱な修理は、第一に、林右衛門の頑健な体を憎んだ。それから、本家の附人として、彼が陰に持っている権柄を憎んだ。最後に、彼の「家」を中心とする忠義を憎んだ。「主を主とも思わぬ奴じゃ。」――こう云う修理の語の中には、これらの憎しみが、燻りながら燃える火のように、暗い焔を蔵していたのである。

そこへ、突然、思いがけない非謀が、内室の口によっ

て伝えられた。林右衛門は修理を押込め隠居にして、板倉佐渡守の子息を養子に迎えようとする。それが、偶然、内室の耳へ洩(も)れた。――これを聞いた修理が、眦(まなじり)を裂いて憤ったのは無理もない。

成程、林右衛門は、板倉家を大事に思うかも知れない。が、忠義と云うものは現在仕(つか)えている主人を蔑(ないがしろ)にしてまでも、「家」のためを計るべきものであろうか。しかも、林右衛門の「家」を憂(うれ)えるのは、杞憂(きゆう)と云えば杞憂である。彼はその杞憂のために、自分を押込め隠居にしようとした。あるいはその物々しい忠義呼(よば)わりの後に、あわよくば、家を横領しようとする

野心でもあるのかも知れない。――そう思うと修理は、どんな酷刑（こっけい）でも、この不臣の行（おこない）を罰するには、軽すぎるように思われた。

彼は、内室からこの話を聞くと、すぐに、以前彼の乳人（めのと）を勤めていた、田中宇左衛門という老人を呼んで、こう言った。

「林右衛門めを縛（しば）り首にせい。」

宇左衛門は、半白の頭を傾けた。年よりもふけた、彼の顔は、この頃の心労で一層皺（しわ）を増している。――林右衛門の企（くわだ）ては、彼も快くは思っていない。が、何と云っても相手は本家からの附人（つけびと）である。

「縛り首は穏便でございますまい。武士らしく切腹でも申しつけまするならば、格別でございますが。」

修理はこれを聞くと、嘲笑うような眼で、宇左衛門を見た。そうして、二三度強く頭を振った。

「いや人でなし奴に、切腹を申しつける廉はない。縛り首にせい。縛り首にじゃ。」

が、そう云いながら、どうしたのか、彼は、血の色のない頬へ、はらはらと涙を落した。そうして、それから——いつものように両手で、鬢の毛をかきむしり始めた。

縛り首にしろと云う命が出た事は、直（ただち）に腹心の近習（きんじゅ）から、林右衛門に伝えられた。

「よいわ。この上は、林右衛門も意地ずくじゃ。手を拱（こまぬ）いて縛り首もうたれまい。」

彼は昂然として、こう云った。そうして、今まで彼につきまとっていた得体（えたい）の知れない不安が、この沙汰を聞くと同時に、跡方なく消えてしまうのを意識した。今の彼の心にあるものは、修理に対するあからさまな

憎しみである。もう修理は、彼にとって、主人ではない。その修理を憎むのに、何の憚る所があろう。——彼の心の明るくなったのは、無意識ながら、全く彼がこう云う論理を、刹那の間に認めたからである。

そこで、彼は、妻子家来を引き具して、白昼、修理の屋敷を立ち退いた。作法通り、立ち退き先の所書きは、座敷の壁に貼ってある。槍も、林右衛門自ら、小腋にして、先に立った。武具を担ったり、足弱を扶けたりしている若党草履取を加えても、一行の人数は、漸く十人にすぎない。それが、とり乱した気色もなく、つれ立って、門を出た。

延享（えんきょう）四年三月の末である。門の外では、生暖（なまあたたか）い風が、桜の花と砂埃（すなほこり）とを、一つに武者窓へふきつけている。林右衛門は、その風の中に立って、もう一応、往来の右左を見廻した。そうして、それから槍で、一同に左へ行けと相図をした。

二　田中宇左衛門

林右衛門（りんえもん）の立ち退（の）いた後は、田中宇左衛門が代って、家老を勤めた。彼は乳人（めのと）をしていた関係上、修理（しゅり）を見る眼が、自（おのずか）らほかの家来とはちがっている。彼は親

のような心もちで、修理の逆上（ぎゃくじょう）をいたわった。修理もまた、彼にだけは、比較的従順に振舞ったらしい。そこで、主従の関係は、林右衛門のいた時から見ると、遥に滑（なめらか）になって来た。

宇左衛門は、修理の発作（ほっさ）が、夏が来ると共に、漸く怠（おこた）り出したのを喜んだ。彼も万一修理が殿中で無礼を働きはしないかと云う事を、惧（おそ）れない訳ではない。が、林右衛門は、それを「家」に関（かかわ）る大事として、惧れた。併し、彼は、それを「主（しゅう）」に関る大事として惧れたのである。

勿論、「家」と云う事も、彼の念頭には上（のぼ）っていた。

が、変があるにしてもそれは単に、「家」を亡すが故に、大事なのではない。「主（しゅう）」をして、「家」を亡さしむるが故に――「主（しゅう）」をして、不孝の名を負わしむるが故に、大事なのである。では、その大事を未然（みぜん）に防ぐには、どうしたら、いいであろうか。この点になると、宇左衛門は林右衛門ほど明瞭な、意見を持っていないようであった。恐らく彼は、神明の加護と自分の赤誠とで、修理の逆上の鎮まるように祈るよりほかは、なかったのであろう。

　その年の八月一日、徳川幕府では、所謂（いわゆる）八朔（はっさく）の儀式を行う日に、修理は病後初めての出仕（しゅっし）をした。そうし

て、その序（ついで）に、当時西丸（にしまる）にいた、若年寄の板倉佐渡守を訪うて、帰宅した。が、別に殿中では、何も粗匆（そそう）をしなかったらしい。宇左衛門は、始めて、愁眉（しゅうび）を開く事が出来るような心もちがした。

　しかし、彼の悦びは、その日一日だけも、続かなかった。夜（よる）になると間もなく、板倉佐渡守から急な使があって、早速来るようにと云う沙汰が、凶兆（きょうちょう）のように彼を脅（おびやか）したからである。夜陰に及んで、突然召しを受ける。――そう云う事は、林右衛門の代から、まだ一度も聞いた事がない。しかも今日は、初めて修理が登城をした日である。――宇左衛門は、不吉（ふきつ）な予感

に襲われながら、慌(あわただ)しく佐渡守の屋敷へ参候した。

すると、果して、修理が佐渡守に無礼の振舞があったと云う話である。——今日出仕を終ってから、修理は、白帷子(しろかたびら)に長上下(ながかみしも)のままで、西丸の佐渡守を訪れた。見た所、顔色(かおいろ)もすぐれないようだから、あるいはまだ快癒がはかばかしくないのかと思ったが、話して見ると、格別、病人らしい容子(ようす)もない。そこで安心して、暫く世間話をしている中に、偶然、佐渡守が、いつものように前島林右衛門の安否を訊ねた。すると、修理は急に額を暗くして、「林右衛門めは、先頃(さきごろ)、手前屋敷を駈落(かけお)ち致してござる。」と云う。林右衛門が、どう云

う人間かと云う事は、佐渡守もよく知っている。何か仔細(しさい)がなくては、妄(みだり)に主家(しゅか)を駈落ちなどする男ではない。こう思ったから、佐渡守は、その仔細を尋ねると同時に、本家からの附人(つけびと)にどう云う間違いが起っても、親類中へ相談なり、知らせなりしないのは、穏(おだやか)でない旨を忠告した。ところが、修理は、これを聞くと、眼の色を変えながら、刀の柄(つか)へ手をかけて、「佐渡守殿は、別して、林右衛門めを贔屓(ひいき)にせられるようでござるが、手前家来の仕置は、不肖ながら手前一存で取計らい申す。如何に当時出頭(しゅっとう)の若年寄でも、いらぬ世話はお置きなされい。」と云う口上である。そこ

ですがの佐渡守も、あまりの事に呆れ返って、御用繁多を幸に、早速その場を外してしまった。――

「よいか。」ここまで話して来て、佐渡守は、今更のように、苦い顔をした。

――第一に、林右衛門の立ち退いた趣を、一門衆へ通達しないのは、宇左衛門の罪である。第二に、まだ逆上の気味のある修理を、登城させたのも、やはり彼の責を免れない。佐渡守だったから、いいが、もし今日のような雑言を、列座の大名衆にでも云ったとしたら、板倉家七千石は、忽ち、改易になってしまう。――
―

「そこでじゃ。今後は必ずとも、他出無用に致すように、別して、出仕登城の儀は、その方より、堅くさし止むるがよい。」

佐渡守は、こう云って、じろりと宇左衛門を見た。

「唯（た）だ主（しゅう）につれて、その方まで逆上しそうなのが、心配じゃ。よいか。きっと申しつけたぞ。」

宇左衛門は眉をひそめながら、思切った声で答えた。

「よろしゅうござりまする、しかと向後（こうご）は慎むでござりましょう。」

「おお、二度と過（あやまち）をせぬのが、何よりじゃ。」

佐渡守は、吐き出すように、こう云った。

「その儀は、宇左衛門、一命にかけて、承知仕りました。」

彼は、眼に涙をためながら懇願するように、佐渡守を見た。が、その眼の中には、哀憐（あいれん）を請う情と共に、犯し難い決心の色が、浮んでいる。――必ず修理の他出を、禁ずる事が出来ると云う決心ではない。禁ずる事が出来なかったら、どうすると云う、決心である。

佐渡守は、これを見ると、また顔をしかめながら、面倒臭そうに、横を向いた。

「主（しゅう）」の意に従えば、「家」が危（あや）うい。「家」を立てようとすれば、「主」の意に悖（もと）る事になる。嘗（かつて）は、林右衛門も、この苦境に陥っていた。が、彼には「家」のために「主」を捨てる勇気がある。と云うよりは、むしろ、始からそれほど「主」を大事に思っていない。だから、彼は、容易（たやす）く、「家」のために「主」を犠牲（ぎせい）にした。

しかし、自分には、それが出来ない。自分は、「家」の利害だけを計るには、余りに「主（しゅう）」に親しみすぎて

いる。「家」のために、ただ、「家」と云う名のために、どうして、現在の「主」を無理に隠居などさせられよう。自分の眼から見れば、今の修理も、破魔弓(はまゆみ)こそ持たないものの、幼少の修理と変りがない。自分が絵解(えど)きをした絵本、自分が手をとって習わせた難波津(なにわづ)の歌、それから、自分が尾をつけた紙鳶(いかのぼり)——そう云う物も、まざまざと、自分の記憶に残っている。……

そうかと云って、「主(しゅう)」をそのままにして置けば、独り「家」が亡びるだけではない。「主」自身にも凶事(きょうじ)が起りそうである。利害の打算から云えば、林右衛門のとった策は、唯一(ゆいいつ)の、そうしてまた、最も賢明なも

のに相違ない。自分も、それは認めている。その癖、それが、自分には、どうしても実行する事が出来ないのである。

遠くで稲妻（いなずま）のする空の下を、修理の屋敷へ帰りながら、宇左衛門は悄然（しょうぜん）と腕を組んで、こんな事を何度となく胸の中で繰り返えした。

修理（しゅり）は、翌日、宇左衛門から、佐渡守の云い渡した

一部始終を聞くと、忽ち顔を曇らせた。が、それぎりで、格別いつものように、とり上（のぼ）せる気色（けしき）もない。宇左衛門は、気づかいながら、幾分か安堵（あんど）して、その日はそのまま、下って来た。

それから、かれこれ十日ばかりの間、修理は、居間にとじこもって、毎日ぼんやり考え事に耽っていた。宇左衛門の顔を見ても、口を利（き）かない。いや、ただ一度、小雨（こさめ）のふる日に、時鳥（ほととぎす）の啼く声を聞いて、「あれは鶯の巣をぬすむそうじゃな。」とつぶやいた事がある。その時でさえ、宇左衛門が、それを潮（しお）に、話しかけたが、彼は、また黙って、うす暗い空へ眼をやってしまっ

た。そのほかは、勿論、唖（おし）のように口をつぐんで、じっと襖障子（ふすましょうじ）を見つめている。顔には、何の感情も浮んでいない。

　所が、ある夜、十五日の総出仕が二三日の中に迫った時の事である。修理は突然宇左衛門をよびよせて、人払いの上、陰気な顔をしながら、こんな事を云った。

「先達（せんだって）、佐渡殿も云われた通り、この病体では、とても御奉公は覚束（おぼつか）ないようじゃ。ついては、身共もいっそ隠居しようかと思う。」

　宇左衛門は、ためらった。これが本心なら、元よりこれに越した事はないが、どうして、修理はそれほど

容易に、家督を譲る気になれたのであろう。――

「御尤もでございます。佐渡守様もあのように、仰せられますからは、残念ながら、そうなさるよりほかはございますまい。が、まず一応は、御一門衆へも……」

「いや、いや、隠居の儀なら、林右衛門の成敗とは変って、相談せずとも、一門衆は同意の筈じゃ。」

修理、こう云って、苦々しげに、微笑した。

「さようでもございますまい。」

宇左衛門は、傷しそうな顔をして、修理を見た。が、相手は、さらに耳へ入れる容子もない。

「さて、隠居すれば、出仕しようと思うても出仕する

事は出来ぬ。されば、」修理はじっと宇左衛門の顔を見ながら、一句一句、重みを量（はか）るように、「その前に、今一度出仕して、西丸の大御所様（吉宗）へ、御目通りがしたい。どうじゃ。十五日に、登城（とじょう）させてはくれまいか。」

宇左衛門は、黙って、眉をひそめた。

「それも、たった一度じゃ。」

「恐れながら、その儀ばかりは。」

「いかぬか。」

二人は、顔を見合せながら、黙った。しんとした部屋の中には、油を吸う燈心の音よりほかに、聞えるも

のはない。――宇左衛門は、この暫くの間を、一年のように長く感じた。佐渡守へ云い切った手前、それを修理に許しては自分の武士がたたないからである。

「佐渡殿の云われた事は、承知の上での頼みじゃ。」

ほどを経て、修理が云った。

「登城を許せば、その方が、一門衆の不興(ふきょう)をうける事も、修理は、よう存じているが、思うて見い。修理は一門衆はもとより、家来(けらい)にも見離された乱心者じゃ。」

そう云いながら、彼の声は、次第に感動のふるえを帯びて来た。見れば、眼も涙ぐんでいる。

「世の嘲(あざけ)りはうける。家督は人の手に渡す。天道の

光さえ、修理にはささぬかと思うような身の上じゃ。その修理が、今生の望にただ一度、出仕したいと云う、それをこばむような宇左衛門ではあるまい。宇左衛門なら、この修理を、あわれとこそ思え、憎いとは思わぬ筈じゃ。修理は、宇左衛門を親とも思う。兄弟とも思う。親兄弟よりも、猶更（なおさら）なつかしいものと思う。広い世界に、修理がたのみに思うのは、ただその方一人きりじゃ。さればこそ、無理な頼みもする。が、これも決して、一生に二度とは云わぬ。ただ、今度（こんど）一度だけじゃ。宇左衛門、どうかこの心を察してくれい。どうかこの無理を許してくれい。これ、この通りじゃ。」

彼は、家老の前へ両手をついて、涙を落しながら、額（ひたい）を畳へつけようとした。宇左衛門は、感動した。

「御手をおあげ下さいまし。御手をおあげ下さいまし。勿体（もったい）のうございます。」

彼は、修理（しゅり）の手をとって、無理に畳から離させた。そうして泣いた。すると、泣くに従って、彼の心には次第にある安心が、溢（あふ）れるともなく、溢れて来る。——彼は涙の中（なか）に、佐渡守の前で云い切った語（ことば）を、再びありありと思い浮べた。

「よろしゅうございまする。佐渡守様が何とおっしゃりましょうとも、万一の場合には、宇左衛門皺腹（しわばら）を

仕(つかまつ)れば、すむ事でございまする。私(わたくし)一人(ひとり)の粗忽(そこつ)にして、きっと御登城おさせ申しましょう。」

これを聞くと、修理の顔は、急に別人の如く喜びにかがやいた。その変り方には、役者のような巧みさがある。がまた、役者にないような自然さもある。――彼は、突然調子の外(はず)れた笑い声を洩(も)らした。

「おお、許してくれるか。忝(かたじけな)い。忝いぞよ。」

そう云って、彼は嬉しそうに、左右を顧みた。

「皆のもの、よう聞け。宇左衛門は、登城を許してくれたぞ。」

人払いをした居間には、彼と宇左衛門のほかに誰も

いない。皆のもの——宇左衛門は、気づかわしそうに膝を進めて、行燈の火影に恐る恐る、修理の眼の中を窺った。

三　刃傷

延享四年八月十五日の朝、五つ時過ぎに、修理は、殿中で、何の恩怨もない。肥後国熊本の城主、細川越中守宗教を殺害した。その顛末は、こうである。

細川家は、諸侯の中でも、すぐれて、武備に富んだ大名である。元姫君（もとひめぎみ）と云われた宗教（むねのり）の内室さえ、武芸の道には明（あかる）かった。まして宗教の嗜（たしな）みに、疎（おろそか）な所などのあるべき筈はない。それが、「三斎（さんさい）の末なればこそ細川は、二歳（にさい）に斬（き）られ、五歳（ごさい）ごとなる。」と謳（うた）われるような死を遂げたのは、完（まった）く時の運であろう。

そう云えば、細川家には、この凶変（きょうへん）の起る前兆が、後（のち）になって考えれば、幾つもあった。――第一に、そ

の年三月中旬、品川伊佐羅子（いさらご）の上屋敷（かみやしき）が、火事で焼けた。これは、邸内に妙見（みょうけん）大菩薩があって、その神前の水吹石（みずふきいし）と云う石が、火災のある毎（ごと）に水を吹くので、未嘗（いまだかつて）、焼けたと云う事のない屋敷である。第二に、五月上旬、門へ打つ守り札を、魚籃（ぎょらん）の愛染院（あいぜんいん）から奉ったのを見ると、御武運長久御息災（ごそくさい）とある可き所に災の字が書いてない。これは、上野宿坊（しゅくぼう）の院代（いんだい）へ問い合せた上、早速愛染院に書き直させた。第三に、八月上旬、屋敷の広間あたりから、夜な夜な大きな怪火が出て、芝の方へ飛んで行ったと云う。

そのほか、八月十四日の昼には、天文に通じている

家来の才木茂右衛門（さいきもえもん）と云う男が目付（めつけ）へ来て、「明十五日は、殿の御身（おんみ）に大変があるかも知れませぬ。昨夜（さくや）天文を見ますと、将星が落ちそうになって居ります。どうか御慎み第一に、御他出などなさいませんよう。」と、こう云った。目付は、元来余り天文などに信を措（お）いていない。が、日頃この男の予言は、主人が尊敬しているので、取あえず近習（きんじゅ）の者に話して、その旨を越中守の耳へ入れた。そこで、十五日に催す能狂言（のうきょうげん）とか、登城の帰りに客に行くとか云う事は、見合せる事になったが、御奉公の一つと云う廉（かど）で、出仕だけは止（や）めにならなかったらしい。

それが、翌日になると、また不吉な前兆が、加わった。――十五日には、いつも越中守自身、麻上下に着換えてから、八幡大菩薩に、神酒を備えるのが慣例になっている。ところが、その日は、小姓の手から神酒を入れた瓶子を二つ、三宝へのせたまま受取って、それを神前へ備えようとすると、どうした拍子か瓶子は二つとも倒れて、神酒が外へこぼれてしまった。その時は、さすがに一同、思わず顔色を変えたと云う事である。

翌日、越中守は登城すると、御坊主（おぼうず）田代祐悦（たしろゆうえつ）が供をして、まず、大広間へ通った。が、やがて、大便を催したので、今度は御坊主黒木閑斎（かんさい）をつれて、湯呑み所際（じょぎわ）の厠（かわや）へはいって、用を足（た）した。さて、厠を出て、うすぐらい手水所（ちょうずどころ）で手を洗っていると突然後（うしろ）から、誰とも知れず、声をかけて、斬りつけたものがある。驚いて、振り返ると、その拍子にまた二の太刀が、すかさず眉間（みけん）へ閃（ひらめ）いた。そのために血が眼へはいって、越中守は、相手の顔も見定める事が出来ない。相手は、

そこへつけこんで、たたみかけ、たたみかけ、幾太刀（いくたち）となく浴せかけた。そうして、越中守がよろめきながら、とうとう、四（し）の間（ま）の縁に仆（たお）れてしまうと、脇差（わきざし）をそこへ捨てたなり、慌ててどこか見えなくなってしまった。

ところが、伴をしていた黒木閑斎が、不意の大変に狼狽（ろうばい）して、大広間の方へ逃げて行ったなり、これもどこかへ隠れてしまったので、誰もこの刃傷（にんじょう）を知るものがない。それを、暫くしてから、漸（ようや）く本間定五郎（さだごろう）と云う小拾人（こじゅうにん）が、御番所（ごばんしょ）から下部屋（しもべや）へ来る途中で発見した。そこで、すぐに御徒目付（おかちめつけ）へ知らせる。御徒目付か

らは、御徒組頭久下善兵衛（くげぜんべえ）、御徒目付土田半右衛門（はんえもん）、菰田仁右衛門（こもだにえもん）、などが駈けつける。——殿中では忽ち、蜂（はち）の巣を破ったような騒動が出来（しゅったい）した。

それから、一同集って、手負（ておい）を抱きあげて見ると、顔も体も血まみれで誰とも更に見分ける事が出来ない。が、耳へ口をつけて呼ぶと、漸く微（かすか）な声で、「細川越中」と答えた。続いて、「相手はどなたでござる」と尋ねたが、「上下（かみしも）を着た男」と云う答えがあっただけで、その後は、もうこちらの声も通じないらしい。創（きず）は「首構（くびがまえ）七寸程、左肩（ひだりかた）六七寸ばかり、右肩五寸ばかり、左右手四五ケ所、鼻上耳脇また頭（かしら）に疵（きず）二三ケ所、背中

右の脇腹まで筋違(すじかい)に一尺五寸ばかり」である。そこで、当番御目付土屋長太郎、橋本阿波守(あわのかみ)は勿論、大目付河野豊前守(こうのぶぜんのかみ)も立ち合って、一まず手負いを、焚火(たきび)の間(ま)へ舁(かつ)ぎこんだ。そうしてそのまわりを小屏風(こびょうぶ)で囲んで、五人の御坊主を附き添わせた上に、大広間詰の諸大名が、代る代る来て介抱(かいほう)した。中でも松平兵部少輔(ひょうぶしょうゆう)は、ここへ舁(かつ)ぎこむ途中から、最も親切に劬(いたわ)ったので、わき眼にも、情誼の篤(あつ)さが忍ばれたそうである。

その間に、一方では老中(ろうじゅう)若年寄衆へこの急変を届けた上で、万一のために、玄関先から大手まで、厳しく門々を打たせてしまった。これを見た大手先(おおてさき)の大小

名の家来は、驚破、殿中に椿事があったと云うので、立ち騒ぐ事が一通りでない。何度目付衆が出て、制しても、すぐまた、海嘯のように、押し返して来る。そこへ、殿中の混雑もまた、益々甚しくなり出した。これは御目付土屋長太郎が、御徒目付、火の番などを召し連れて、番所番所から勝手まで、根気よく刃傷の相手を探して歩いたが、どうしても、その「上下を着た男」を見つける事が出来なかったからである。

すると、意外にも、相手は、これらの人々の眼にはかからないで、かえって宝井宗賀と云う御坊主のために、発見された。――宗賀は大胆な男で、これより先、

一同のさがさないような場所場所を、独りでしらべて歩いていた。それがふと焚火（たきび）の間（ま）の近くの厠（かわや）の中を見ると、鬢（びん）の毛をかき乱した男が一人、影のように蹲（うずくま）っている。うす暗いので、はっきりわからないが、どうやら鼻紙嚢（ぶくろ）から鋏（はさみ）を出して、そのかき乱した鬢（びん）の毛を鋏んででもいるらしい。そこで宗賀（そうが）は、側へよって声をかけた。

「どなたでござる。」

「これは、人を殺したで、髪を切っているものでござる。」

男は、しわがれた声で、こう答えた。

もう疑う所はない。宗賀は、すぐに人を呼んで、この男を厠（かわや）の中から、ひきずり出した。そうして、とりあえず、それを御徒目付の手に渡した。

御徒目付はまた、それを蘇鉄（そてつ）の間（ま）へつれて行って、大目付始め御目付衆立ち合いの上で、刃傷（にんじょう）の仔細（しさい）を問い質（ただ）した。が、男は、物々しい殿中の騒ぎを、茫然と眺めるばかりで、更に答えらしい答えをしない。偶々（たまたま）口を開けば、ただ時鳥（ほととぎす）の事を云う。そうして、そのあい間には、血に染まった手で、何度となく、鬢の毛をかきむしった。――修理は既に、発狂（はっきょう）していたのである。

　細川越中守は、焚火の間で、息をひきとった。が、大御所(おおごしょ)吉宗(よしむね)の内意を受けて、手負(てお)いと披露(ひろう)したまま駕籠(かご)で中の口から、平川口へ出て引きとらせた。公(おおやけ)に死去の届が出たのは、二十一日の事である。

　修理(しゅり)は、越中守が引きとった後(あと)で、すぐに水野監物(けんもつ)に預けられた。これも中の口から、平川口へ、青網(あおあみ)をかけた駕籠(かご)で出たのである。駕籠のまわりは水野家の

足軽が五十人、一様に新しい柿の帷子を着、新しい白の股引をはいて、新しい棒をつきながら、警固した。――この行列は、監物の日頃不意に備える手配が、行きとどいていた証拠として、当時のほめ物になったそうである。

それから七日目の二十二日に、大目付石河土佐守が、上使に立った。上使の趣は、「其方儀乱心したとは申しながら、細川越中守手疵養生不相叶致死去候に付、水野監物宅にて切腹被申付者也」と云うのである。修理は、上使の前で、短刀を法の如くさし出されたが、茫然と手を膝の上に重ねたまま、とろうとする

気色（けしき）もない。そこで、介錯（かいしゃく）に立った水野の家来吉田弥三左衛門（やそうざえもん）が、止むを得ず後（うしろ）からその首をうち落した。うち落したと云っても、喉（のど）の皮一重（ひとえ）はのこっている。弥三左衛門は、その首を手にとって、下から検使の役人に見せた。頬骨（ほおぼね）の高い、皮膚の黄ばんだ、いたいたしい首である。眼は勿論つぶっていない。

　検使は、これを見ると、血のにおいを嗅（か）ぎながら、満足そうに、「見事」と声をかけた。

同日、田中宇左衛門は、板倉式部の屋敷で、縛り首に処せられた。これは「修理病気に付、禁足申付候様にと屹度（きっと）、板倉佐渡守兼ねて申渡置候処、自身の計らいにて登城させ候故、かかる凶事出来（きょうじしゅったい）、七千石断絶に及び候段、言語道断の不届者（ふとどきもの）」という罪状である。

板倉周防守（すおうのかみ）、同式部、同佐渡守、酒井左衛門尉（さえもんのじょう）、松平右近将監（うこんしょうげん）等の一族縁者が、遠慮を仰せつかったのは云うまでもない。そのほか、越中守を見捨てて逃げた黒木閑斎（かんさい）は、扶持（ふち）を召上げられた上、追放になった。

修理(しゅり)の刃傷(にんじょう)は、恐らく過失であろう。細川家の九曜(くよう)の星と、板倉家の九曜の巴と衣類の紋所(もんどころ)が似ているために、修理は、佐渡守を刺(さ)そうとして、誤って越中守を害したのである。以前、毛利主水正(もうりもんどのしょう)を、水野隼人正(はやとのしょう)が斬ったのも、やはりこの人違いであった。殊に、手水所(ちょうずどころ)のような、うす暗い所では、こう云う間違いも、起りやすい。——これが当時の定評であった。が、板倉佐渡守だけは、この定評をよろこばない。

彼は、この話が出ると、いつも苦々しげに、こう云った。

「佐渡は、修理に刃傷されるような覚えは、毛頭（もうとう）ない。まして、あの乱心者のした事じゃ。大方（おおかた）、何と云う事もなく、肥後侯を斬ったのであろう。人違などとは、迷惑至極な臆測じゃ。その証拠には、大目付の前へ出ても、修理は、時鳥（ほととぎす）がどうやら云うていたそうではないか。されば、時鳥じゃと思って、斬ったのかも知れぬ。」

（大正六年二月）

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房
1986（昭和61）年9月24日第1刷発行
1995（平成7）年10月5日第13刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり

１９９８年12月６日公開
２００４年３月７日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。